



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	狩猟塔トーレ・デ・ラ・パラダの絵画装飾研究 : 16, 17世紀のスペイン宮廷における君主教育と宮廷絵画ディエゴ・ベラスケスとの関連から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, のぞみ
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12803号
Issue Date	2017-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66638
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Nozomi_Yamada_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 の ぞ み

主査 教 授 谷 古 宇 尚
審査委員 副査 教 授 北 村 清 彦
副査 准教授 近 藤 智 彦

学位論文題名

狩猟塔トーレ・デ・ラ・パラダの絵画装飾研究—16、17 世紀のスペイン宮廷における
君主教育と宮廷画家ディエゴ・ベラスケスとの関連から—

1) 当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、ベラスケスの画業の中でも大きな位置を占めるトーレという一つの複合的モニュメントを包括的に考察した点で、スペイン・バロック期の美術史研究において重要であり、今後同分野において第一に参照されるべき文献となるものである。トーレ全体に君主教育という一貫した、しかしながら緩やかな意味的な連関をもつ装飾プログラムを想定することによって、これまで十分に検討されてこなかった多くの作品の図像上の問題に新たな光を当てている。とりわけ《狩猟服姿のフェルナンド枢機卿親王の肖像》や《イソップ》《メニッポス》像、四点の道化像などのベラスケス作品について、バルタサル・カルロス皇太子に施されるべき教育の観点から妥当な解釈を提示していることが注目される。またトーレのルーベンス工房の作品を含めて、意味の連関を根拠に元々の作品配置の再構成に成功している箇所もあり、本論文の後半に付けられる「資料編」とともに、基礎的な研究としての内容・体裁を備えたものとなっている。

図像解釈において本論文は基本的には財産目録や書簡など文書館に収められている資料や、主に 16、17 世紀の刊行本を参照しているが、エンブレム・ブックを大きく取り上げる点が独自である。それは単に絵画作品の図像の典拠として利用するだけでなく、エンブレム・ブックのモットー、ピクトウーラ、エピグラムという文字とイメージによる構成を、君主教育の方法の変化と比較する点が新しい視点といえる。すなわちテキストからイメージへとメディアを拡張させる君主教育と、エンブレム・ブックの普及を類比的な動きとしてとらえようとするのである。これに加えて『イソップ寓話』にみられる修辞法（「簡潔さ」や「範例」を用いるやり方）とエンブレム・ブックを近接させることにより、トーレの装飾が君主教育という目的を果たすために、まさにこの時代にふさわしく絵画の陳列という方法をとったことを説得力を持って論じている。このように典拠を示して作品の意味内容を明らかにするという図像学の範囲を越えて、イメージを利用した意味の生成と伝達のプロセスにまで踏み込んでいる点が、本論文のもう一つの成果である。

さらに本論文は建築的側面に注目することにより、トーレの理解を大きく推し進めた。トーレは、内部装飾においても政治的なメッセージ性の強い「城館」と異なり、また庭園を持たないため建築類型的には「ヴィラ」とも異なるが、私的なオティウム（徳の涵養に役立つ閑暇）の場としては「ヴィラ」としての性格を備える。トーレの特異な建築形態は唯一、アルカーサル宮の一部「黄金の塔」と比較できるが、そこには図書室が置かれていた。トーレには絵画、「黄金の塔」には図書という王の私的な蒐集物が置かれ、いずれも教育に資するものであり、対となるものである。こうした数少ない塔の作例の比較分析を踏まえた上で、本論文は「望楼（Atalaya）」というトーレの別称に注目し、この語が 16、17 世紀において真実を見出す場所という象徴的な意味を担っていたことを指摘する。望楼から見晴らす「眼」は、王の統治の比喻であり、トーレの中に配置される絵画は君主の備えるべき徳、とりわけ真実を見極める「賢明」や「判断力」を教えようとするものである。このような建築の意味論的考察が絵画装飾プログラムに枠組みを与え、トーレを総体として見通せる視点を持つことができるようになったことも本論文の重要な成果とし

て挙げられる。

一方、審査の過程の中でいくつかの問題点も指摘された。第一に、わかりやすく連作・サイクルを構成するのではない一群の作品を一貫したものとして解釈することの困難を解消する具体的な方法が示されていない点である。重点的に分析されたトーレの数部屋以外への言及も少なく、そのためベラスケスがキュレーターの立場でトーレ全体の装飾デザインを担当したとする本論文の立場を十分に説明しきれていない。次に、トーレにおいて絵画作品が実際にどのように利用されていたのか、君主教育の内実がイメージしにくい点、他には、建築類型と建築の機能の分析が整理されていない点、「徳」論の分析が思想史的にみるとやや表層的な点、『イソップ寓話』やオウィディウスの『変身物語』、フィロストラトスの『イマギネス』など古典作品の受容の仕方を単純にとらえすぎている点などが挙げられた。しかしながら申請者はこうした事柄について問題点を認識しており、今後の研究によって十分修正されるものであり、本論文の成果を覆すものではないと判断される。

2) 学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位授与されるにふさわしいものであると判断した。